

論文内容の要旨

氏名	川口 尚毅
論文題目	English Participial Constructions: Multiple Origins and Syntactic Extensions (英語の分詞構文：多重起源と統語拡張)
要旨	
<p>本論文は、生成文法理論、特に言語習得の段階間の制約を組み込むことにより反証可能性を従来の理論より高めようとする動的文法理論 (Kajita (1977, 1997, 2004)) の枠組みに基づき、英語の分詞構文を通時的かつ共時的に分析し、それらの分析を可能とする汎時的モデルの可能性について論じている。通時的には、分詞構文は、先行研究が述べるように、ラテン語からの翻訳借用に遡及可能であるとしながらも、分詞構文が翻訳借用される要因には様々なものがあり、この意味で分詞構文は「多重起源的」であると論じている。共時的には、現代英語の分詞構文は、典型的なものから非典型的なものに至るまでの多層性をなし、後者の存在は、前者からの統語的再解釈により説明されると論じている。これら通時的分析と共時的分析を通して、現代英語を習得中の子供は、英語の歴史変化を部分的に再現している可能性があるとの提案を行なっている。本論文は英語で書かれ、全6章で構成され、総頁数はA4版 xii+252頁である。</p> <p>本論文の構成は以下の通りである。第1章では、分詞構文の基本的特徴を確認し、本論文で扱う2つの問題をおおまかに提示し、全体6章からなる論文構成について述べている。分詞構文は、時制を持つ定形の主節と時制を持たない非定形の自由付加部とからなり、後者をその生起位置に従って、「文頭型」「文中型」「文末型」と本論文では呼び分けている。自由付加部の非明示的主語は、意味的に、主節の明示的主語と対応するのが原則である点と、主節と自由付加部の間には、(書き言葉にあつては) コンマが置かれる点とを確認している。2つの問題とは分詞構文に関する通時的問題 (第4章でその解決に関して詳論) と共時的問題 (第5章でその解決に関して詳論) である。</p> <p>第2章では、本論文で取り組む2つの問題点をより具体的に述べ、そうすることで本論文が採るべき指針を示している。第一の問題点は、通時的問題点、すなわち、分詞構文の由来 (起源) と関係している。分詞構文の由来を記述した研究は、おおよそ、次の3つの立場に大別可能である: (A) 分詞構文の由来において独立分詞構文との関係を認めるもの; (B) 英語以外の外国語の影響を認めているもの; (C) (A)と(B)以外の立場をとるもの3つである。3つのそれぞれの立場の代表的な先行研究、すなわち、Sweet (1898)、Bain (1863) と Yonekura (1985) と Killie & Swan (2009)、Malmstrom & Weaver (1973)を検討し、通時的問題点は以下の3点に収斂するとしている。(i)分詞構文は、独立分詞構文から生まれたのか。(ii)英語は、ラテン語からの翻訳借用をなぜ受け入れられたのか。(iii)コンマ挿入の動機とはなにか。本論文は、先行研究のうち Yonekura (1985)の主張を基本的には正しいものと認めているが、彼の主張も松浪 (1967)からの潜在的な反論を受けうるとし、上記(ii)の問題を立てている。ここでいう松浪の潜在的な反論とは、外国語の影響や翻訳借用に言及す</p>	

るためには、翻訳元の言語だけに言及するのではなく、さらに、翻訳先の言語の属性にも言及することが必要であるというものである。

第二の問題点は、共時的問題点である。現在分詞形の動詞には、その基本義として、「時間の同時性」が内在している。時間の同時性は、現在分詞形の動詞を有する分詞構文にも関与するので、早瀬 (2002)と Tomozawa (2003)は、分詞構文の基本義を「時間のオーバーラップ」(すなわち、主節と自由付加部とで表された事柄が時間的に重複していること)と同定している。Wierzbicka (1988) は、他方、自然言語にあっては、この同時性が必ずしも完全な時間のオーバーラップとして解釈されるとは限らないとし、分詞構文において、時間的同時性が破られると、即時継起性が生じると指摘している。本論文は、これらの先行研究を基に、即時継起性を示す分詞構文は次のジレンマを抱えているとしている。すなわち、即時継起性を示す分詞構文は、基本義から逸脱し、かつ、Wierzbicka により容認可能性の低下が見出されているにもかかわらず、実例が見出される。よって、即時継起性の分詞構文は、問題を抱えている言語事実であると本論文は捉える。さらに加えて、もう一つのジレンマが存在することを本論文は指摘している。時間的同時性はおろか、即時継起性をも破る分詞構文、すなわち、非即時継起的分詞構文すらも存在している。以上から、共時的問題として、なぜ、即時継起的/非即時継起的分詞構文は、現在分詞形の動詞の基本義から逸脱しているにもかかわらず、可能になっているのかという問題が生じるとしている。

第3章では、第2章で詳述した2つの問題を解くための、そして第4章での通時的分析と5章での共時的分析を可能にするための本論文が依拠する動的文法理論の紹介とそれを採用する根拠が論じられている。本論文は、第2章で述べた通時的問題と共時的問題を同時に解こうと試みる。通時的問題には、世代間の「言語変化」が含意され、共時的問題にも、言語習得の段階間の「言語変化」が含意されている(このことは、用語「統語的再解釈」「統語拡張」から自然にもたらされる)。このことから、本論文が依拠すべき理論が備えているべき条件が浮き彫りとなる:(A)言語変化(の過程)に言及できること;(B)文法体系の核から最周辺部にまで言及できること;(C)言語変化(の過程)や習得順序に言及することによって、高い反証可能性を有すること;(D) 伝統文法が有している(核や基本形から周辺部や変異形に至るまでの)多層的な文法観を体現できることである。本論文の理論的枠組みの候補として、すぐに想起可能なのは、チョムスキーをはじめとする生成文法主流派の理論である。しかし、彼らの理論は、言語習得や言語変化の「過程」を理論から捨象しており、言語習得における言語変化や習得順序に言及することがない(Kajita (1997)は、このような接近法を‘output-oriented’ (出力説)であるとか‘static’ (静的)と呼ぶことで、理論で取り扱われる対象が、言語習得の結果の最終出力としての大人の文法であって、言語変化やその推移に言及がない点を強調している)。以上の点を考慮し、本論文は動的な文法理論 (Kajita (1977, 1997)) に依拠するとの判断を下している。動的な文法理論の理論書式が次のものとして示されている(ここで、G は文法を、P は属性を、L は習得中の言語を、i (+1)は習得段階をそれぞれ表す) : If G (L, i) has property P, then G (L, i + 1) may have property P'. (Kajita (1997: 381))。この理論書式は、文法拡張を表したも

のである。この理論書式から、動的文法理論は、言語変化の過程に言及でき (= 上記必要条件 A)、文法拡張を援用すれば、文法体系の核から最周辺部にまで言及でき (= 上記必要条件 B/D)、言語変化や習得順序に言及することによって高い反証可能性を有する (= 上記必要条件 C) (むしろ、習得順序を予測するほどである) と言える。よって、本論文では、動的文法理論を採用すると結論している。

第4章では、第2章で詳述した通時的問題を第3章で紹介した動的文法理論の枠組みに基づいた分析を立てることにより解決している。まず、Yonekura (1985) の分詞構文がラテン語からの翻訳借用—模倣—により誕生したという主張が基本的に正しいことを、ラテン語の聖書からの事例とラテン語の聖書を翻訳した古英語と中英語の聖書からの事例を綿密に比較検討することにより、実証している。さらに、この比較検討を通して、独立分詞構文に生起する明示的主語の削除が行われていないことと分詞構文の翻訳元たるラテン語において分詞構文が絶対奪格構文 (= 独立分詞構文の起源) ではないこと (一様に奪格ではなく、主格であること) とを根拠に、分詞構文と独立分詞構文は、起源において、無関係であるとの結論を下している。

第4章の中心部分では、「文頭型」「文中型」「文末型」自由付加部のそれぞれの起源について論じている。まず、文頭型自由付加部が古英語と中英語において忌避された原因を、翻訳者がラテン語の分詞構造に相対した時、これを主節主語の前置修飾語として解釈しようとし、しかし2語以上から構成される連鎖によって、名詞を前置修飾することが不可能であったために、文頭型自由付加部を忌避したと推定している。それでも、文頭型自由付加部がラテン語から古英語と中英語に導入可能であった理由は、ラテン語の分詞構造が持つ動詞的側面に翻訳者が注目し、それを主節との等位接続ないし並置構造 (= 基体) として捉え、古英語と中英語にも等位接続ないし並置構造 (= モデル) が存在することを頼りに古英語と中英語に文頭型自由付加部 (= 派生体) として導入できたのだと分析している。文中型自由付加部もその起源はラテン語に求められるが、ラテン語の後置修飾の分詞構造 (= 基体) が、中英語にも後置修飾構造ないし非制限関係節 (= モデル) が存在することを頼りに中英語に非制限関係節 (= 派生体) として英語に一旦導入されたとする。中英語において一旦非制限関係節として導入された現在分詞節は、中英語以降、主節主語と現在分詞節が線形解釈されることで、副詞的に解釈されるようになり、統語的には依然として非制限的關係節であったため、統語と意味の乖離が生じることとなった。この乖離を解消すべく、非制限的關係節としての現在分詞節 (= 基体) が副詞的挿入節 (= モデル) をいわば手本として、統語的再解釈を受けることにより、意味的にも統語的にも副詞節的である文中型自由付加部 (= 派生体) が生成されるに至ったと分析している。さらに、この統語的再解釈が起こったことをより明白に示す手立てとしてコンマ挿入がなされたと分析している。文末型自由付加部もその起源はラテン語に求められるとし、ラテン語の後置型自由付加部 (= 基体) が、中英語にも動詞を修飾する副詞相当句 (= モデル) が存在することを頼りに文末型自由付加部 (= 派生体) として中英語に導入されたと分析している。さらに、準述詞構文と半動名詞構文における補部を構成する現在分詞構造が統語的再解釈を受け、付加部を構成する後置型自由付加部となるメカニズムも明らか

かにしている。この際も、コンマ挿入を統語的再解釈が起きた帰結として分析している。「文頭型」「文中型」「文末型」自由付加部のそれぞれの導入に關与するモデルの存在によって第2章で述べた松浪 (1967)からの潜在的な反論への解答を与えている。

第5章では、第2章で詳述した共時的問題を第3章で紹介した動的な文法理論の枠組みに基づいた分析を立てることにより解決している。第2章で同定したように、現代英語の分詞構文には、その基本義である同時性を満たす中核メンバーとその基本義から逸脱し、即時継起性を示す周辺メンバーと時間的同時性はおろか即時継起性をも破る非即時継起性を示す末端メンバーすらも存在している。後者2者がなぜ現代英語に存在しうるのかを、前者の中核メンバーが統語的には動詞修飾の副詞相当語句であるのに意味的には等位接続的であるという統語と意味の乖離を起し、その乖離を解消すべく定形の等位接続構造をモデルとして、統語的再解釈を受け、統語的にも意味的にも等位接続的な後者2者が生成されるに至ったと説明している。さらに非即時継起性を示す末端メンバーがなぜ周辺メンバーとしてではなく末端メンバーとして存在するかの説明を認知的制約が絡むことに求めている。すなわち、同時性と即時継起性を満足する2つの事象を近似性と類似性に基づいて人間は知覚的にグルーピングできるが、非即時継起性を示す2つの事象を知覚的にグルーピングはできない。それを可能にするには、仲介 (mediation) の助けを借りなければならない。この仲介という認知的制約が絡むので、その分、非即時継起性を示す分詞構文は末端メンバーとしての資格を有することとなると説明している。

第6章は、本論文の結論と今後の研究の展望を述べている。通時的問題点に対する本論文の結論は以下のものである。分詞構文は多重起源構文であり、その起源は、自由付加部ごとに異なるとともに、独立分詞構文のそれとも異なる。分詞構文は、異なる起源を持つ構文を統合した存在である。したがって、1つの構文の起源を1つに絞り込む理由はない。共時的問題点に対する本論文の結論は以下のものである。分詞構文は、文法体系に同一的かつ唯一の理論的資格で参画しているわけではない。むしろ、一部の分詞構文は文法体系の核を占めるが、残りの分詞構文は文法体系の周辺部を占めている。後者の類の分詞構文は、前者の類からの統語的拡張—統語的再解釈—によって説明される。具体的には、統語的再解釈は、定形の等位接続構文をモデルとして行われる。最後に、第4章の通時的分析と第5章の共時的分析を通じて、現代英語を習得する子供は、英語の歴史変化を部分的に再現する可能性があることを示唆し、さらに、今後は通時的研究と共時的研究を包含するような汎時的モデルの可能性が開かれるのではないかと論じている。

論文審査の結果の要旨

氏名	川口 尚毅
論文題目	English Participial Constructions: Multiple Origins and Syntactic Extensions (英語の分詞構文：多重起源と統語拡張)
要旨	
<p>本論文は、生成文法理論、特に言語習得の段階間の制約を組み込むことにより反証可能性を従来の理論より高めようとする動的文法理論 (Kajita (1977, 1997, 2004)) の枠組みに基づき、英語の分詞構文を通時的かつ共時的に分析し、それらの分析を通して汎時的モデルの可能性について論じている。本論文は英語で書かれ、全6章で構成され、総頁数はA4版 xii+252頁である。</p> <p>本論文の内容は、国内有数の英語学関連学会の機関誌に掲載あるいは掲載予定の論文に基づいている。第4章の通時的分析は、近代英語協会の機関誌『近代英語研究』40号の論文に、第5章の事実観察と記述の部分は、英語語法文法学会の『英語語法文法研究』28号と30号の2本の論文に、第5章のアスペクトに関わる議論は、日本認知言語学会の『認知言語学研究』第7巻の論文に、とりわけ、第3章の動的文法理論の紹介と第5章の共時的分析は、日本英語学会の機関誌 <i>English Linguistics</i> 40号の論文に依拠している。このように本論文の内容は、通時的研究においても共時的研究においても、それらの事実面と理論面の両面に渡って、すでに関連する学会の機関誌で厳格に審査され公に高い評価を得ている。よって、本論文は、極めて高い水準にある博士論文と判断される。</p> <p>ここで、本論文の評価すべき主要な点を3つあげておく。第1点目は、分詞構文の通時的研究への貢献である。まず、Yonekura (1985)による、分詞構文がラテン語からの翻訳借用により誕生したという主張が基本的に正しいことを、ラテン語の聖書からの事例とラテン語の聖書を翻訳した古英語と中英語の聖書からの事例を綿密に比較検討することにより明らかにした点とこの比較検討を通して分詞構文と独立分詞構文は起源において無関係であることを明らかにした点は非常に実証的で評価される。次に、動的文法理論における基体、モデル、派生体という概念を用いて、「文頭型」「文中型」「文末型」自由付加部のそれぞれについて、ラテン語からの古英語と中英語への借用のメカニズムを捉えた点が独創的であり高く評価される。このモデルの存在によって、松浪 (1967)による、翻訳借用に言及するには、翻訳元の言語だけではなく翻訳先の言語の属性にも言及することが必要であるとの翻訳借用説への潜在的な反論に答えた点も通時面での新たな貢献として評価される。最後に、動的文法理論における言語習得の段階間制約を歴史変化の世代間制約に読み替えることにより、歴史変化に心的実在性を与えることで、3つの自由付加部のその後の歴史発達のメカニズムを説明し、それぞれの自由付加部は史的経緯が異なると主張した点は非常に独創性に富み高く評価される。自由付加部におけるコンマ挿入を統語的再解釈が起きた帰結として分析している点も興味深い。</p>	

第2点目は、分詞構文の共時的研究への貢献である。まず、現代英語の分詞構文には、その基本義である同時性を満たす中核メンバーと、その基本義から逸脱し即時継起性を示す周辺メンバーと、時間的同时性はおろか即時継起性をも破る非即時継起性を示す末端メンバーの3つが存在することを容認可能性の差異と実例に基づく綿密な事実観察により同定した点は非常に実証的で評価できる。次に、後者2者がなぜ現代英語に存在するのかを前者の中核メンバーに統語的再解釈が適用されたためと動的文法理論により説明した点も説得力があり評価できる。すなわち、前者の中核メンバーが統語的には動詞修飾の副詞相当語句であるのに意味的には等位接続的であるという統語と意味の乖離を起こし、その乖離を解消すべく、定形の等位接続構造をモデルとして、統語的再解釈により、統語的にも意味的にも等位接続的な後者2者が生成されるに至ったと説明している。さらに、非即時継起性を示す末端メンバーがなぜ周辺メンバーとしてではなく末端メンバーとして存在するかの説明を認知的制約が絡むことに求めた点も非常に独創性に富み評価される。同時性と即時継起性を満足する2つの事象を近似性と類似性に基づいて人間は知覚的にグルーピングできるが、非即時継起性を示す2つの事象を知覚的にグルーピングはできない。それを可能にするには、仲介 (mediation) の助けを借りなければならない。この仲介という認知的制約が絡むので、その分、非即時継起性を示す分詞構文は末端メンバーとしての資格を有することになると説明している。

第3点目は、通時的分析と共時的分析を通して、現代英語を習得する子供は、英語の歴史変化を部分的に再現する可能性があることを示唆し、さらに、今後は通時的研究と共時的研究を包含する汎時的モデルを追求する可能性が開かれるのではないかと論じた点も挑戦的で評価できる。

本論文にはこのように評価すべき点が多くあるが、ラテン語の分詞構文と古英語と中英語の分詞構文を比較する時に用いた文献に偏りがある点、語用論的説明にさらなる配慮が必要な点、言語資料をさらに吟味する必要がある点といった問題点もある。

しかしながら、これらの問題点は今後の研鑽を積むことにより克服可能なものであって、本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文は博士 (英語学) の学位を授与するに値する内容を有したものである。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	大室 剛志
副査	教授	菊池 清明
副査	教授	岡田 伸夫

最終審査の結果の要旨

氏名	川口 尚毅
試験科目	
判定	(合格) ・ 不合格
要旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し審査するために、2024年1月25日に博士論文の内容を中心に口述試験を実施した。</p> <p>まず、申請者よりラテン語からの古英語と中英語への分詞構文の翻訳借用過程が実証的に説明され、次に、動的文法理論による実証性と独創性に富んだ英語の分詞構文の通時的分析と共時的分析が明解に提示された。審査員からこれらの通時的分析と共時的分析について事実面と理論面に関して多くの様々な質問がなされた。申請者は、それらの質問に対し、明確に、かつ、的確に答えることができた。その質疑応答により、申請者が英語の分詞構文に対して十分妥当な通時的分析と共時的分析を提出していることが確認できた。</p> <p>本論文は、日本英語学会、日本認知言語学会、英語語法文法学会、近代英語協会といった国内有数の英語学関連学会の機関誌にすでに掲載あるいは掲載予定の論文に基づいており、公に評価を得た極めて高い水準の博士論文と判断される。</p> <p>申請者の外国語の試験については、英語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語による要約における高い表現力と理解力から判断して試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合的に、かつ、慎重に判断した結果、審査委員会は本博士論文に対し全員一致で博士（英語学）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	大室 剛志
副査	教授	菊池 清明
副査	教授	岡田 伸夫